

平成26年度授業づくり拠点校（活用力研究事業）実践事例

指導者 三井 竜彦

第4学年 国語科学習指導案

1 単元名 人物の気持の変化を読もう・書こう

2 指導の立場

- 今年度は学級担任ではないため、4年生の学級に1単元入った実践である。本学級には5月に一度、詩『水平線』の授業で入ったことがある。特定の元気の良い子が発表して授業が進んでいった記憶がある。実態を知るために、児童にアンケートを行った。設問と結果は以下の3つである。

1 「7教科で好きな順に番号をつけましょう。」

国語科を1番に挙げた児童は33人中3名、2番が2名である。反対に嫌いな部類に入る6番は13名、7番は5名であった。

2 「国語の勉強できらいなことは何ですか」

多かったのは、「作文（16名）」「漢字（9名）」あとは「字を書く」「音読」（各2名）などであった。

3 「国語の勉強で好きなことは何ですか」

多かったのは「漢字（12名）」である。「作文（3名）」もいた。学級全体として、国語が好きな児童は少なく、作文が嫌いな児童が多いという結果であった。

以上のことから、「作文をすらすら書けるようにすれば、国語を好きになる児童が増えるだろう」という仮説を立てた。

- 全教科書に古くから載っている教材なので、指導例も山のようにあり、あまり新しい教材解釈が入り込む余地がない。その中で教材の特性として「場面間の書かれていない物語」が想像できるようなつくりになっていることが新しく読み取れた。

例えば、2場面と3場面の間には、隠された物語が暗示されている。2場面に「兵十のうちのだれが死んだんだろう。」という文がある。ここまではごんは兵十の家族構成（おっかあと二人ぐらし）を知らない。ところが3場面すぐには「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」と、ごんはもう兵十のうちのことを知っている。このことから2場面と3場面の間に、ごんは、兵十のことが気になって、何度か様子を見に行っていることが分かる。そのきっかけとなるのは、穴の中での後悔である。ここを児童に気づかせると、ごんの兵十への思いがより強く共感できるであろう。

また、5場面と6場面の間にも隠れた物語が見える。5場面までのごんは、つぐないのためのくりを「入り口に、置いて」帰っている。そして「神様にお礼を言うんじゃあ、おれは、引き合わないなあ。」と思ったごんはその夜、明日もくりを持って行くか行かないか、どのような置き方をしたら気づいてもらえるかを悩み、考えたはずである。その結果、ごんは兵十の家の中まで

入り、くりを固めて置くという行動を取っている。ここまで読みとらせると、動物の本能の一つである「危機回避意識」を、兵十と分かり合いたいという思いが超えてしまったことが、最大の悲劇へとつながったと理解できる。

そして最後の6場面と1場面の間にも隠された物語がある。ごんを撃った後の兵十には選択肢が2つあった。一つはごんをどこかに捨てて、この事実を闇に葬ることである。いたずらばかりして村中の嫌われ者であったであろうごんが姿を見せなくなっても、だれも気に留めないであろう。しかし兵十はもう一つの行動を選択した。多分ごんのなきがらを埋めて墓を作り、村人たちに、ごんが自分の家に毎日くりを持ってきてくれたこと、本当は心根の優しいきつねだったことを話して回った。だから何百年間もの長い間、違う村にまでごんの話が語り継がれてきた。それが1場面最初の一文でわかる。

こういった隠された物語を読み解くことは、児童にとって楽しい活動になるだろう。それを想像して書くことは、作文嫌いを少しでも解消するための一助となるであろう。

- 「学力向上を見据えた授業づくり」ということで、「読むこと」「書くこと」領域を平行して学習していく。全国学力・学習状況調査の問題で目に付くのはやはり「条件作文」である。いろいろな条件に合わせて書くという力は、学習経験によって培われるところが大きい。そこで、単元の学習11時間中9時間（一次と二次のすべての時間）で、学習したことを条件作文にまとめるという活動を仕組む。そうすることによって、学習を振り返ることもできる。「読むために書き、書くために読む」学習になれば、2領域で身に付けるべき力が相関し合って向上することが期待できるであろう。

3 単元の目標

- 物語に興味を持ち、人物の気持の変化をとらえようとすることができる。
（関心・意欲・態度）
- 場面の移り変わりに気をつけて、叙述に即して人物の気持の変化を読み取ることができる。（読むこと）
- 読み取ったことを、それぞれの条件に沿って作文することができる。（書くこと）
- 内言・外言などの用語とその意味を知り、読み取りに生かすことができる。
（言語事項）

4 指導計画（全11時間）

1次

- 1（読）15分程度で全文を読む。
（書）物語の内容を「ごん」「兵十」という言葉を入れて決まった字数で書く。
- 2（読）内言・外言という用語とその意味を理解し、ごんのセリフは内言か独り言しかないごんの寂しさを読みとる。
（書）内言・外言ということばを使い、物語の内容を決まった字数で書く。

2次

3 (読) 1場面のごんのした「いたずら」に対するごんと兵十の認識の違いを読みとる。

(書) 1場面のうなぎのいたずらに対する、ごんと兵十の認識の違いを「ごん」「兵十」「うなぎ」という言葉を使って、決まった字数で書く。

4 (読) 二場面の中で、ごんの気持が大きく変わったところを探すことを通して、兵十のおっかあの死について誰にも確かめることができなかつたごんの立場と寂しさを読み取る。

(書) 二場面のごんと兵十のすれちがいの様子を、条件に基づいて書く。

5 (読) 二場面と三場面の間に隠れた物語を叙述から探すことを通して、兵十に気持が寄り添っていくごんの心情を読みとる。

(書) 読みとったことから、二場面と三場面の間の物語を条件に合わせて書く。

6 (読) 三場面でごんが大きく変わったところを話し合うことを通して、兵十に償おうとするごんの気持を読み取る。

(書) いわしを投げ込んだことに対するごんと兵十の認識のすれ違いを条件に合わせて書く。

7 (読) 兵十たちについていくごんの様子で四場面と五場面で違うところを通して、つぐないに対するすれちがいを読みとる。

(書) ごんのした「つぐない」に対する、ごんと兵十の認識の違いを条件に合わせて書く。

8 (読) 兵十と加助の話を聞いた次の日に、自分ならばくりを持っていくかいかないかを考えることを通して、ごんの「どうしても自分のことを兵十に気づいてもらいたかった」という思いを読みとる。

(書) 「ごんが家の中に入ったのは」に続けて、自分の考えを書く。

9 (読) ごんと兵十の相手に対する思いの違いが最大の悲劇を生んだことに【本時】 気づき、叙述から、その後の兵十の行動を想像する。

(書) 読みとったことを参考にしながら、条件に合わせて、「その後のごんぎつね」を書く。

3次

10 (書) 前時の学習や条件作文を参考にしながら、『ごんぎつね～その後』の物語を書く。

11 (書) 『ごんぎつね～その後』を紹介しあう。

5 本時案

(1) 主眼

ごんと兵十の相手に対する思いの違いが最大の悲劇を生んだことに気づき、叙述からその後の兵十が取った行動を想像することができる。(読むこと)

読みとったことを参考にしながら、条件に合わせて『ごんぎつね～その後』の物語を書くことができる。(書くこと)

(2) 学習過程

学習活動	教師の働きかけ
<p>1 ごんを撃った兵十が駆け寄る時にどんなことを考えていたかを読み取る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音読する。 ・意見をノートに書き、教師に見せる。 ・「やったぞ」「やりすぎたかな」の意見に分け、自分がどちらの考えに近いかな挙手する。 ・兵十が駆け寄った後、どこを見ていたかを叙述から読み取る。 ・ごんの倒れていた位置を叙述から読み取る。 ・兵十がごんのことなど眼中になかった、ごんに対して心配も喜びももっていなかったことを確認する。 ・ごんの兵十に対する思いを吹き出しに書く。 <p>2 その後、兵十が取った行動を想像する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ごんを撃って後悔し、ごんのために何かをしてあげたことが感じられる文を探す。 ・兵十のことを天国から見ていたごんの気持ちを想像する。 <p>3 兵十がごんのためにどんなことをしてあげたかを想像し、条件に合わせて書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○一人ひとり音読ができているかをチェックする。 ○すべての意見に丸をつけ、「やったぞ」と「やりすぎたかな」の意見に分けて板書させる。 ○兵十が①うちの中②土間にくりが固めておいてある③ごん の順に見たことを図に表わす。 ○「目を落とす」「ばたりと倒れる」に着目させる。 ○兵十は「うちの中があらされていないか」が心配で、真下に倒れているごんに見向きもしなかったことを図で確認させる。 ○「気づいてくれて嬉しい」「撃つことはないのに」の2つの意見を取り上げる。 【評価】「兵十がどんなことを考えていたか」に対する、自分なりの意見が持てる。 ○兵十がごんにしてあげたであろうことを出させる。 ○「ごん、おまえだったのか…」「ばたりと取り落としました。」「これは私が小さいときに…」(最初の文) 【評価】兵十が後悔し、ごんのために何かをしてあげたことが感じられる文を探すことができる。 ○条件を書いた紙を提示する。 ○作文が苦手な児童への手立てとして、教師の見本の文を見せる。 【評価】条件に合わせて作文することができる。

1 単元名 人物の気持の変化を考えて読もう～新美南吉『ごんぎつね』～

2 ねらい ごんと兵十の相手に対する思いの違いが最大の悲劇を生んだことに気づき、叙述から、その後の兵十の行動を想像することができる。(読むこと)

読みとったことを参考にしながら、条件に合わせて「その後の『ごんぎつね』」を書くことができる。(書くこと)

ごんぎつね
新美南吉

ごんをうってかけよる兵十は、どんなことを考えたか。

やったぞ

- ・ やつとひとめたぞ
- ・ これで安心だ
- ・ おつかあのかたきをとったぞ

ごんのことなど、まったく相手にしていなかった。

すれちがい

兵十

A B C

くり

後かい

- ・ やりすぎたかな
- ・ 死んでしまったのかな
- ・ かわいそうだったかな

ごん

- 兵十がしたこと
- ・ 墓を立てた
- ・ 花を供えた
- ・ くりをそえた

○ 根きよとなる文

- ・ ごん、おまえだったのか。
- ・ ひなわじゆうをばたりと取り落としました。

これは、わたしがちいさいときに、...

うつつことはないのに

やつと気づいてくられたね

1 ごんに対する兵十の認識を読みとる。

発問：ごんをうってかけよる兵十は、どんなことを考えていたでしょう。

① 意見をノートに書き、教師の指示で黒板の左右に板書する。

② 左右の意見をまとめた題名をつけさせ、自分の考えを認知させる。

③ 駆け寄った兵十の視点の移動を叙述から確認する。

④ ごんが倒れていた位置を叙述から読みとる。

⑤ 視覚で分かりやすいように、考えを図に描かせる。

⑥ 目を落とす・ばたりと倒れました ↓ 兵十の真下 叙述に着目させる。

【評価】兵十の考えていたことをノートに書くことができたか。

2 兵十に対するごんの認識を想起する。

発問：あんなに話したがっていた兵十から話しかけられたごんは、何と答えたかったでしょう。

① ごんが兵十に何と言いたかったか吹き出しに書く。

② 書けた子から発表させ、かけない子の参考にさせる。

③ ごんが自分を撃った兵十を許したかを考える。

【評価】ごんの言いたかったことを、吹き出しに書けたか。

3 その後の兵十の行動を読みとる。

発問：このあと兵十はどうしたでしょう。本文から考えましょう。

① その後の兵十の行動を考えさせる。

② その根拠となる文を探させる。

③ ごんが兵十を許したかを考える。

【評価】兵十の行動の根拠となる文を探することができたか。

4 その後の『ごんぎつね』を条件に合わせて書く

指示：その後の『ごんぎつね』を「ごん」「兵十」を入れ、41～60字で書きましょう。

◆ 教師が書いた見本を提示し、書けない子の参考にさせる。

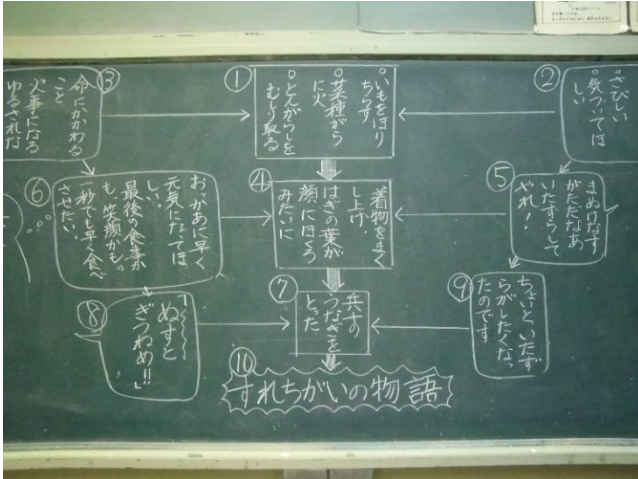
【評価】条件に合わせて、物語を書くことができたか。

6 研究協議での意見

研究協議は、ワークショップ型で行い、参観者に成果と課題をご示唆いただいた。以下がその主な意見である。

【成果】

- ・ 毎時間条件作文を書くことで、作文に対する抵抗感をなくし、力がつく。
- ・ 条件作文を書かせることで、学習の振り返りとなる。
- ・ 書く活動が条件作文以外にも3つもあり、書く力がつけられていると感じた。
- ・ 読解内容を図に描かせることで、理解を深め、視覚化ができていた。
- ・ 板書構造が分かりやすく、児童に板書させているのもよかった。
- ・ 必ずどの場面・どの叙述かに返って確認していたので、本文を意識していた。
- ・ 机間指導などでのノート・考え・音読などの確認が確実になされていた。
- ・ めあてを全員で音読しながら書かせるので、共有化ができていた。



【課題】

- ・ 条件作文は文字数が制限されているので、ほとんどの児童の意見が同じになるのではないか。
- ・ 条件作文以外での学習内容の振り返りも必要ではないか。
- ・ 条件作文を書かせたあとの交流も必要ではないだろうか。
- ・ 振り返りの時間がもう少し確保できると深まったと思う。
- ・ 子供どうしの話し合いの場面が少なかった。
- ・ 振り返りの視点がめあてと違っていてもよいのか。

本授業は、1 単元（1 1 時間）を4年の学級を借りて実践した。その時間、担任はもちろん、いろいろな先生方に参観していただき、条件作文を続けて書かせることの有効性を感じていただけたと思う。

また、1 1 月に行われた中国地区国語教育研究大会でも発表する機会をいただき、参観の先生方から同様の感想もいただいた。

最後に、単元を貫く言語活動として、1 0 時間目に書いた「その後の『ごんぎつね』』という児童の作文を紹介する。

兵十は、ごんのそばに来て、「気づかなくてごめんね。」と言いました。でもごんはよみがえったりはしません。兵十は、一日中泣きました。

次の日、加助が家に来て、「神様はまだくりをめぐんでくださるのか。」と言いました。兵十は、ごんがくりをくれたことが分かったけど、加助には、だまっておきました。

それから兵十は、ごんが固めておいていったくりを、ごんのことを思いながら、大切に食べました。

兵十は、どんなにいやなことがあっても、ごんのことを思えば、どんなかべでものりこえていけるような気がしました。

ごんは、天国でいつも兵十を見守っています。おしまい。